

NPO 純正律音楽研究会会報 ～2012年8月発行～

ひびきジャーナル



〒168-0072 東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 Tel:03-5317-0291

Fax:03-5317-0289 e-mail:puremusic0804@yahoo.co.jp

No.33

発行日 平成24年8月10日
発行責任者 NPO 法人 純正律音楽研究会
編集 相坂政夫



皆様いかがおすごしでしょうか。7月28日「かなつくホール」での「玉木宏樹メモリアルコンサート」には、猛暑にもかかわらず、多くの方々にご参加いただき誠にありがとうございました。玉木もあの世で喜んでいるものと思います。今回発売されました「純正律」CDブックは、玉木が今年の8月頃から作成にあたり、出版直前に亡くなりました。後を純正律音楽研究会理事の福田六花さんに継いで頂き、コンサート会場でようやく販売することができました。大変好評で事務局にて販売しております。

年内にコンサートを開催する予定です。詳細が決まりましたら皆様に御連絡差し上げます。尚、年会費について重要なお知らせがあります。巻末にてご確認下さい。今後とも純正律音楽研究会をよろしくお願い申し上げます。

節目の今年

洗足音楽大学 教授・ヴァイオリニスト
NPO 法人 純正律音楽研究会 代表
水野佐知香

2012年は私にとって節目となる年となってしまいました。

玉木さんが1月に、そして30年ほぼ一緒に暮らしていた義理の姉のピアニスト、荒井真理が5月に・・・他にも知人が多く旅立っていきました。

玉木さんもそうですが、覚悟をしつつもあつという間に逝ってしまい、この世に残った私たちが、心も身体もついていくのが大変！

おまけに玉木さんにおいては、私に、純正律研究会の代表のお土産付きで・・・でも、素晴らしい人達とのご縁をいただく、置き土産もたくさん！！姉の友人達、生徒さん、その子ども達、・・・私は一度に「孫」までたくさんできたみたい・・・

また、純正律研究会を通して玉木さんの奥様をはじめ、大切な方々との出会いをいただいています。不思議なのは、玉木さんも姉もいなくなって、こんな人達と親しかったのね！！というより、私も出会って間もないのに、昔からよく知っている？？？という大切な方たち、私のまわりにまた、輪がいっぱいひろがっています。本当に感謝です。

姉の生徒さん達には、こんなことを言われてしまいました。今回、大変だったので「水野先生は、関係者別の名簿を作り、何かあった時に、お知らせをするところを、今からわかるようにしておいて下さい！」なんて・・・(もちろん冗談半分ですが・・・)。

7月28日の「玉木宏樹メモリアルコンサート」では、終演後の打上げに参加して、純正律音楽研究会の会員の皆様との新しい出会いもありました。

玉木さんが亡くなってからは、私の知らなかった数々の彼の編曲、作曲を知り、また、洗足で一緒に教えているサクソ奏者の岩本伸一氏とのあるコンサート本番後の打上げで、玉木さんと一緒にレコーディングしたという話を聞き、ビックリ！！この作品は、サクソと弦楽四重奏のアンサンブルで、「ガーシュインの香り」というCDで、岩本氏からお借りしましたら、「香り」と名打っている通り、本当にCDに香水がしみこませてあり、何十年もたっているのに

香っていました。この「香り」シリーズは他にも「ショパンの香り」「モーツァルトの香り」「チャイコフスキーの香り」等、数種類あるそうです。玉木さんの30才位の作品でしょうか？楽譜をそろえて、ぜひコンサートで演奏してみたいと考えています。

節目といえば、私の生徒さんたち！！2010年に国内での1番の登竜門とされている「日本音楽コンクール」で中学生優勝をした、山根一仁さんと、3位の高校1年生だった毛利文香さん。今年高校三年生になった毛利さんは、この5月に行われた「ソウル国際音楽コンクール」で、最年少優勝をして世界の先生方をはじめ多くの音楽界の方々から注目されています。私も二次予選の日には、ソウルに日帰りで行きましたし、ライブでインターネット配信で演奏を聴いて見る事ができたので、演奏が始まる直前、終わった後は、常に電話で話す事ができて、アドバイスをしたり、喜びを分かち合ったり、すばらしい時を過ごしました。彼女は、年内には、杉田劇場でのリサイタル、他に神奈川フィル、群馬交響楽団等との共演が決まっています。山根くんは、紀尾井ホール、フィリアホール等でのリサイタル、札幌交響楽団、新日本フィル、そして、N響と2度のコンサートの共演が決まっています。

この7月には、ブエノスアイレス国際音楽コンクールで高校2年生の土井遥さんが見事3位に入り、聴衆賞、オーケストラ賞も同時に受賞しました。生徒さんたちが、世界に飛び出していく年になり、私自身もますます精進をしてコツコツ磨きをかけなければ・・・と身の引き締まる思いでいっぱいです。ますます皆様と共に発展できますように、すばらしい出会いに感謝をしつつ、・・・！



“アルチザン”先生の思い出

木村伶香能（箏・三味線演奏家）

玉木光（チェリスト）

私（木村）は現代邦楽研究所にて、初めて玉木先生と出会いました。いつも何かしら本を熱心に読んでいた玉木先生。きまって「先生、今何を読まれているんですか？」と訊ねたものでした。「ん～？これはねえ～云々云々」と先生の講釈を頂戴するのが楽しいひとときでした。恩師の西潟昭子先生と同世代とのことで、玉木先生が同所の為に次から次へと新作を作曲された時期は、とても充実していました。両先生と共に、新潟県の福島潟や、河口湖畔の介護施設「はまなす」など地方での演奏でもご一緒できたことは、今でも懐かしい思い出です。玉木先生は、真綿で包むような物言いは一切されず、音程が悪ければ、「悪い」、アドリブがダサければ、「ダサイなあ、ソレ～」とはっきり仰って我々を鍛えてくれました。竹をスッパリと割ったような潔いご気性でした。

先生と打ち上げのお酒を頂いていた時に、印象に残った言葉があります。「世の中、“アーティスト”という言葉を使う奴が多すぎる。“アーティスト”を突き抜けて“アルチザン（職人）”にならなければダメだ！！」いつになく激昂されて、何ものかに向かって力説されていた姿が今でも思い出されます。大学卒業したての私（木村）にとって、その言葉の真意は何なのだろうか？と深い疑問を抱かずにはいられませんでした。そして、今もその言葉の重みは心に残っています。



2012年7月1日、自由学園の明日館講堂にて、玉木先生の「波間のきらめき」をデュオで演奏いたしました。今年の1月に先生の訃報を聞いて以来、何か先生の作品を演奏できれば、と願っておりましたが、先生は邦楽器の曲を沢山お書きになっていますので、以前にも私たちが取り上げたことのある「光の舞」の他、「光の舞」と対になって演奏される「闇の舞」、三味線とバイオリンの為に書か

れた「Tango Akiko」、などと選択に迷いました。私たちは、2010年から「花鳥風月コンサート」シリーズに取り組んでおりまして、毎年それぞれのテーマを掲げたプログラムを組んでいます。今年は「風」がテーマでしたので、曲の冒頭部、風が吹き荒れるような曲調を持つ「波間のきらめき」の選曲に落ち着きました。この作品は同名のアルバムのために書かれた曲で、オリジナルは玉木先生のバイオリンと吉原佐知子さんのお箏で録音されました。吉原さんも私（木村）と同じく洗足学園音楽大学で講師をしておりまして、演奏にあたりましては、何かと快くアドバイスをいただけたのが幸いです。

「波間のきらめき」は「春の海」に対して「秋の海」を念頭に作曲されたそうで、ダイナミックに荒くれる海の情景と、波が凧いで光をきらきらと反射させる様の対比が、実に鮮やかです。玉木先生のお書きになるメロディーは、どこか切なく、ノスタルジックな響きがあるように思いますが、「波間のきらめき」の叙情的な部分は、そんな「玉木節」を思う存分を思う存分聴くことができ、演奏する本人たちにとっても心洗われる箇所であります。荒れ狂う海の曲想はロック調で、一度聞いたら忘れられない強烈な印象を与えます。ロックといえば、玉木先生はその昔ご自身のロックバンドでバイオリンを弾いておられました。私たちがたまたま見た1970年頃の映画「野良猫ロック・ワイルドジャンボ」でも、自作のサントラでノリノリでグルーヴィーな演奏されておりまして、そちらのメロディーがキャッチー過ぎたおかげで、しばらくは二人で「野良猫ロック」の曲を口ずさむ、という時代錯誤も甚だしいことを流行らせておりました。

一昨年、私たちが婚約をして木村姓が玉木に変わることになりましたが、そのとき同大学で、どこでどう話がこじれてしまったのか、玉木先生のご子息と結婚するという噂が流れました。実は今でも根強くこの噂は残っておりまして、もちろん夫のほうの玉木は先生と血縁関係はなく、その真相を伝播させるためにも、先生の曲を演奏する際は必ず一言「血縁関係はありません」と付け加えて、そのたびに会場の笑いを取っております。そんなわけで、何だか先生を毎回ジョークのネタに使って申し訳なく思いつつも、明日館でもその小話で笑いをとり、終演後に奥様の玉木とみ子様にお会いしたとき、「息子夫婦と思って応援します！」、と仰って頂けたことは、何よりの喜びでした。

昨年末、NYジャパンファンデーションの派遣で、私（木村）は南米3カ国にて演奏させて頂きましたが、その折、真っ先に選曲したのは玉木先生の三味線二重奏「ジャワリ」でした。南米の熱い空気の中で、この曲はきっと明るく楽しく響くだろう、と思ったからです。結果、演奏の力量はさておき、ジャワった後の反響はもの凄くエネルギッシュなものでした。こんなに三味線がよく鳴る、楽器が喜びの声を上げるような二重奏曲はなかなか無いのでは、と思います。玉木先生も西潟先生も、若い者への出し惜しみの無い方で、直筆の楽譜を譲ってくださいったりと、そのご好意に甘えることが多かったのですが、私たちもそのご恩をいつまでも忘れず、これからも「息子夫婦」(?)の名に恥じぬよう、世界各地に「玉木節」をお届け出来たら、と願ってやみません。

連続エッセイ【外科医のうたた寝】第28話
『耳鳴り・不眠・高血圧に効く「純正律」CDブック』

純正律音楽研究会理事
福田六花（シンガー・ランニング・ドクター）

7月に純正律音楽と健康に関する私の著書が出版されました。この本は本来、玉木宏樹さんが著者、私が監修で出版される予定で、昨年より準備が進められていたものです。

1月の玉木さんの急逝にともない一度は白紙に戻った出版計画でしたが、玉木さんの取り組んできた純正律音楽の集大成となる本であること。玉木さんが本の完成に並々ならぬ意欲を持っていたことを出版社（マキノ出版）が酌んでくれ、なんとか出版にこぎつけることが叶いました。ただし故人が著者での健康関係の新刊はなかなか出しづらいと云う事情もあり、私が代筆を務めることになったのです。

玉木さんが作った純正律音楽による数々の楽曲は美しく、そして素晴らしい



ものです。玉木さんは音楽としての美しさを追求して作り上げた作品だったのですが、それを聴いたヒトたちから思いもよらない反響がたくさん寄せられました。

「めまい、耳鳴りが治りました、、、」

「血圧が安定しました。」

「膝が痛いのが治りました、、、」

「不眠症が治りました。すぐに眠くなるので、CDを最後まで聴けません、、」

等々

寄せられた数々の反響と、私が体験した医療の現場での素晴らしい効果から、純正律音楽は心と体に優しいことを確信しました。

20年におよんだ玉木宏樹さんと私の取り組みについて、しっかりと書かせて頂きました。数ある玉木さんの純正律の名曲から7曲を選んだ“究極の癒し”CDもついています。

御高覧、御高聴 頂ければ幸いです。全国の書店でお求めください。

耳鳴り・不眠・高血圧に効く「純正律」CDブック 福田六花 著
(マキノ出版 ビタミン文庫) ¥1470

ムッシュ黒木の純正律講座 第32時限目

平均律普及の思想的背景について(21)

純正律音楽研究会理事 黒木朋興

前回、最後にカエサル「人は現実のすべてが見えるわけではなく、多くの人は見たいと思う現実しか見ない」という言葉を引用した。平均律が普及したのは18世紀のことではなく、早くとも19世紀に入ってから、そしておそらくは19世紀後半にかけてのことだったのではないかと、というテーゼは、平均律信奉者に受け入れがたいものであり、故にそれを示すどのような証拠も彼らの目には入らない、という事態を説明するのにこれ以上の言葉はないだろう。

前にも引いたことがあるが、例えば坂崎紀の「平均律の歴史的的位置」(2001)には「共有弦クラヴィコードの実例、テュルクとC.P.E.バッハの記述から、ドイツにおいては十八世紀中葉には平均律が一般に広く使用されていたことが確

実とみなせる。[...] 音楽作品の実例[...]や同時代の記述から総合的に判断するならば、平均律は十六世紀後半～十七世紀初頭にある程度の範囲で実用化されていたと考えるのが妥当だが、最大限遡ればすでに十六世紀初頭に平均律に調律された鍵盤楽器が存在した可能性さえあるといえるだろう」とある。坂崎は平均律の歴史を出来るだけ過去に遡ることを目的としてこの論考を書いているのは明らかである。

今回、再びこの話題を持ち出すのは、やはり前回引いたイタリア人アメリコ・バルベリが 1869 年に執筆した音楽事典 (*BARBERI Americo, Dizionario enciclopedico universale dei termini tecnici della musica antiqua e moderna (...)*, L. Pirola, Milano 1869, pp.27-29.) の一節の原典が手に入ったからである。今回はドミニク・ドゥヴィの『音楽の整律』(1990) からの孫引きでフランス語からの重訳であったが、今回はイタリア語からの訳を掲載してみたい。

しかしながら、今日においても、この儲けになり執着する職業 [=オルガン製作者] が、あんな怠惰な人たちの手に委ねられている状況を見るのはなんとも嘆かわしい。というのも、彼らは薄くて乏しい技量を越えて、不等分律による音素材の分割について学ぶことができず、故に音の調和というのを全く理解していなかったような人物なのだ。だからいまだに、彼らはモードや諸音を知らず、半音階か、もしくはせいぜい完全 5 度音程 (ほとんど正しく呼応していない) を繰り返しながら調律をしている。このことよりも恥ずべきなのは、和声論のすべての教授が、諸音の連なりに関する生徒への耳の教育を、いまだにこの不等分な調律に頼っているということである。

平均律支持派の人間が、その人物の周りのオルガン製作者たちの間では未だに不等分律が使用され続けていることを嘆いているのだから、当時のイタリアでは決して「平均律が一般に広く使用されていなかった」ことが分かる。

ところが、このような事実は 19 世紀末以降の歴史の叙述においては無視されてしまうことになる。そしてバッハとともに平均律の輝かしい歴史が幕を開けたのだと喧伝されるようになったのだ。

では、事実を隠してまで展開したかった歴史観とは一体何なのであったのだろうか？ 次回以降考えていきたい。

「Musica おおた」の音楽よもやまばなし

♪ 小さな野生「猫」 ♪

純正律音楽研究会 正会員
音楽事務所 Musica おおた
廣川 深

今回のテーマは少し変わっています。まあ、たまには変わった話におつきあい下さい。

現在は空前のペットブームといわれます。ペットとして人気を二分する犬と猫。国内で飼育されている犬の実数は推定 1000 万頭（厚生労働省に届け出のある数とは異なる）、猫は約 10 パーセントの家庭で飼育され合計約 700 万頭（外飼い含む）です。まずは、その歴史からお話しましょう。

犬は 1 万 5000 年ほど前に人間に飼い馴らされたといわれているのに対して、猫の家畜化は犬に比べるとずっと遅く、約 1 万年以内のこととされています。家畜化の経緯の詳細はよくわかっていないのですが、地中海のキプロス島で、約 9500 年前の地層から人骨といっしょに猫の骨が多数見つかったことから、このころから猫が人間に飼われるようになったと思われまふ。ここからは猫にスポットをあてます。（犬派の方、ごめんなさい）

猫の直接の祖先は、現在も北アフリカに生息しているリビアヤマネコであることが遺伝子研究によりわかっています。残念ながらリビアヤマネコは、今は日本の動物園では見ることはできませんが、テレビや写真で見る限り「まるで猫」です。野生のヤマネコは非常に神経質で攻撃性もあり、なかなか人になつきませんが、当時の人々は長い時間をかけて猫を家畜化していったのです。とはいえ、家畜としての歴史の浅い猫には、沢山の魅力あふれる野生が残っています。狩猟本能、運動能力、感覚機能など素晴らしいものがありますが、そのなかで感覚器、特に嗅覚と聴覚に注目してみましよう。猫の嗅覚細胞の数は 2 億くらいで、人間の約 5 倍です。犬の 10 億（警察犬として活躍するシェパードは約 30 億）にはおよびませんが、猫の嗅覚もなかなかのもので、状況判断、危険回避、飼い主や家族と家族以外の人の区別、安全な食べ物の判断など、すべて匂いによって行動します。猫の嗅覚の世界は人間には想像もつきません。さ

らに注目したいのは聴覚です。ネコ科のなかでもヤマネコ、イエネコなどのネコ属の動物は、顔の大きさととの比率で見ると非常に大きな耳を持っています。しかも耳を動かす筋肉も発達しており、左右別々にパラボラアンテナのように動かすことによって、±0.5 度の精度で音源の位置を特定することができます。(周波数にもよりますが) この音源探しは猫の得意技。これには、人間は猫の足元にもおよびません。そのほか、7 万ヘルツの超音波もとらえる可聴域の広さ、20 メートル先のネズミの足音も感知する聴力など、音楽を仕事としている私から見れば、猫の聴覚はちょっと羨ましいものがあります。実は猫は、耳だけでなく足でも音を聞いています。「え？ 足で聞く？」と思われるでしょうが、足の裏の肉球で床や地面の振動を感じ取っているのです。この優れた聴覚は、野生時代に狩りをするために進化したものなのでしょう。その分、猫は大きな音が苦手です。我が家のお嬢様猫は、ピアノやアコーディオン、ドラムなどの音の大きな楽器や、ビッグバンドジャズのような大音量の音楽はあまりお気に召さないようです。野生の世界では、「大きな音=危険のおそれあり」ということなのでしょう。掃除機や冷蔵庫の音などの日常の音が猫にどのように聞こえているかという研究によると、例えば猫にとっての冷蔵庫の音 (2m くらい離れた位置) は人間の聴覚に置き換えてみると交通量が比較的多い交差点くらいだそうです。これだけ優れた嗅覚と聴覚を持っていれば、何か人の役に立ちそうですが、なにしろ猫は人の言うことをなかなか聞かないので…。麻薬犬はいるけど、麻薬猫はいませんからね。

野生とは正反対に、飼い猫ならではの進化もあります。器用に前足 (私は手先と言っている) を使って引き戸を開けることなどはそのひとつでしょう。冬など「寒いんだから開けたら閉めてよ！」と言いたくなりますが、閉めるようになったら...化け猫です。

どんな動物でも、それぞれに素晴らしい能力をもっていますが、特に猫はちょっぴり神秘的なところもあり、魅力いっぱいの動物だと思います。猫は「小さな野生」なのです。

WWF ジャパン
動物検定 猫 3 級

CD レビュー 純正茶寮
< CDFELICITE THOSZ >
純正律音楽研究会理事 黒木朋興



CDFELICITE THOSZ

MAGMA

セヴンス・ジャパン Seventh Japan (2012)

SJAK37

今回こそはまともな純正律ものを紹介しようと思ったのだが、MAGMA がタイミングよく新譜を出したので、友人である私としてはこれを紹介しないわけにはいかない。

この曲は、前回あるいは前々回の来日コンサートでも既に演奏されているが、MAGMA にあってはいつものごとく、ライブの度に曲が変わっていくので、ファンにとってはこれがようやく耳にすることの出来る完成形ということになる。クリスチャンは、コンサートを繰り返しながら曲を作っていく人なので、致し方のないことではある。

クリスチャンは作曲とドラムを担当している。言いたくはないが、正直、天才だと思う。MAGMA というバンドはフランスのジャズロックを代表する存在であるが、教育の国フランスで、彼はなんと音楽を独学で身に付けたという。母親について小さい頃からアトー・ブレイキーなど超有名ジャズミュージシャンが演奏するパリのライブハウスに入り浸っていたという環境も大きいですが、彼に関しては本当に天才という他はないだろう。

以前、インタビューで「普通ドラムはリズムをキープする役割を果たしますが、あなたのプレイは歌っているかのようで、リズムが揺れるのでベース泣か

せだと聞いたことがあります」と問いかけたところ、無然として「私は必ずしもドラムがリズム楽器だとは思っていない。シンバルだって叩く場所と強さによって音の周波数が変わるのだから、十分メロディ楽器だと思う」と返ってきて驚いたことがある。

このような音への繊細さから、彼らの歌詞を構成するコバイア語が出て来るのだと思った。コバイア語とは、子音と母音を組み合わせて作ってある MAGMA の歌のための人造言語である。重要なのは音の響きであり、基本的に意味はない。

確かに、同じラ（440 ヘルツ）の音程の音を歌うにせよ「ZA」という言葉をつけた時と「KRU」という言葉をつけた時では、周波数構成が違って来る。クリスチャンは、メロディにあった言葉を作っていくわけだが、それは彼にとって歌詞を書くというよりは、作曲をしているという感覚なのであろう。

そういう音に対する繊細さを実感するために、純正律ファンの皆さんも一回 MAGMA の音楽を聴いてみて欲しい。今作は、MAGMA のこれまでの曲の中でも、比較的穏やかな曲調を持っているアルバムである。

【不思議な体験編】

翻訳家・きき酒師 川合 浩

先日、近所の和食店でお店の女性が不思議な体験ということでその数日前に経験したことを話してくれた。それをここでご紹介するのは、それなりの文章力が必要となりそうなので、別の機会にということでご了解頂きたい。今回は、それに刺激されたこともあり、私の唯一といってよい不思議な体験を書いてみようと思う。

それは、ほぼ四十年前の高校時代の話だ。同級生のK君が夏休みを利用して伊豆半島一周キャンプ旅行をするという。彼とは特段親友というほどではなかったが、一緒に伊豆半島を回ってみることにした。なぜそうゆう気になったのかも、考えてみれば謎の一つと言っていいだろう。キャンプの経験があれば、それなりの装備も既に持っているだろうが、私はその時が初めてだった。それで、

道具からの調達が始まった。K君に教えてもらったニッピンに行った。そこは秋葉原の登山用品のお店でまだ存在する。秋葉にはパソコン関係やオーディオ関係で行く時は集中して通う感じだが、そのお店の前を通るたびに、今でも高校時代の伊豆旅行のことを思い出す。夏休みに入ったばかりの頃に調達に行った時は、まずはキスリング、寝袋、靴下、コッヘル等を準備したように記憶する。テントはK君が準備してくれた。出かける前日には、母が随分と心配してくれていたことが思い出される。

伊豆半島では、東側から回り始め、移動はバスか徒歩。第1泊目は北川だった。勿論テントでのこと。翌日はお隣の熱川。ここには海岸に露天風呂がある。海を見ながらの入浴である。ひとけの少ない所でのんびりしたキャンプ旅行が続いた。人の多い所は、海水浴で数泊した白浜。下田ではバス通り沿いの崖の上にテントを張ったような気がする。その時、通りがかりの真っ黒に焼けているお兄さんから声をかけられたが、何を言っているのか分からなかった。K君は理解出来たようだか、方言がきつくて私には理解不能だった。次は石廊崎。それから、波勝、加茂、土肥と回って、帰路についたと思う。

波勝には野生の猿がいて、人になれているようで、近くに来ては、ポケットに手を入れて美味しいものをとろうとしていた。猿は左手をポットにかけて右手の侵入を援護しているようで、右手でポケット内をさぐるといった風だった。ここ波勝崎はじゃり浜で素足で歩くには、ごつごつしていて、かつ石が陽に焼けて熱い。浜まで行ってみると、先客がいて、大学生くらいの男性で単独だった。後で聞いたら足立区からだと言っていた。ということで、彼を仮にAさんと呼ぼう。波勝崎でテントを張れるスペースは海岸近くにはなく、バス通りに向かって少し戻った所に、狭いがテントが張れる平坦なスペースがあった。ここで、彼のテントと並んで1泊目。

翌日も天気が大変良く、海に入るには絶好の日より。シュノーケルを使って水中を見れば、手を伸ばせば取れるぐらいの所に、きれいな小魚さん達が普段通りに泳いでいた。ここは、人が多い訳ではないがそれなりの施設は用意されていて外にシャワーの設備もあった。シャワーを使用したAさんを後方に感じながら、じゃり浜を海の方に歩いている時、ふと自分の後ろ姿を見た。それは一瞬だったが、その後ろ姿の先にはキラキラと輝く海が見えていた。それを見た時の目線の高さは普通の人の高さで、位置的には、シャワーを使用している彼の位置からのものだった。ほんの一瞬、まばたき1回分ぐらいの時間だっ

たと思う。海辺まで行き、帰ってきた時、その彼と目が合った。そして彼は言った「神秘的な行動をするね」。

あとで思ったが、その一瞬、私が見た自分自身の後ろ姿は、彼が見ていた視覚イメージそのものだったのではないだろうか。彼が見ているイメージを私がそのまま受信したのではなかろうかと。そして、彼の発言を考えると、彼もまた何かを感じたのではなかろうか。ひょっとしたら、その瞬間、彼は私の視覚イメージを受信していたのかもしれない。

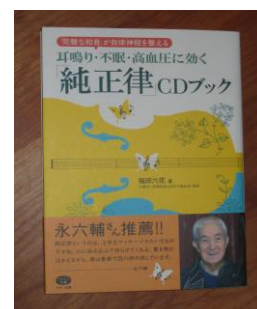
★ 「純正律」 CD ブック(マキノ出版)

新発売 1,470 円(税込)

昨年の夏から、玉木宏樹が作成していた純正律ブックを、純正律音楽研究会理事の福田六花さんが引き継ぎ、ようやく発刊の運びとなりました。

永六輔さん推薦 !!

事務局で販売しております。



★ 年会費についての重要なお知らせ

会員の皆様方には、毎年年会費をお振込いただき誠にありがとうございます。年会費はご入金いただいてから一年後の月末まで有効となっておりますが、事務処理が煩雑になり、振込用紙の送付が遅れたり、重複したりしてしまいましたので、年度ごとのお振込に変えさせて頂くことになりました。ついては、今年度お支払い頂いた会員様には誠に申し訳ございませんが、8月以降は年会費を徴収せず、平成25年度分(1月～12月)から徴収致します。平成25年1月全ての会員様に年会費の郵便振替用紙を送付致しますので、よろしくお願い申し上げます。



おたより募集!

会報のご感想、ご意見、純正律音楽にまつわること等々、なんでもお寄せ下さい。たくさんのお便りを、お待ちしております。

次号の【ひびきジャーナル】にてご紹介させて頂きたいと思っております。

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 NPO 法人 純正律音楽研究会

お電話：03-5317-0291 FAX：03-5317-0289

e-mail：puremusic0804@yahoo.co.jp

<http://just-int.com/>

<http://www.archi-music.com/tamaki/>

平成 24 年 8 月 10 日

発行責任者：NPO 法人 純正律音楽研究会

編集：相坂政夫